

石垣方言の擬音擬態語（1）

外 間 美奈子

はじめに

擬音擬態語⁽¹⁾は目の前の現実を「音」の印象とむすびつけて表現したものであり、日本語は、世界の言語の中でも、擬音擬態語の表現が豊かで、数多くあることが特徴だといわれている。音や様子をどのように感じているのか、擬音擬態語の音声や意味の特徴から分析、研究することは、日本人の言語感覚を知る大きな手がかりとなるものであろう。そして、同じことが石垣方言でも言える。『石垣方言辞典』⁽³⁾をみると、擬音擬態語は副詞に分類され、独立したカテゴリーとしてはあつかわれていないが、それらを分析することで、石垣方言の言語感覚について何かしらの手がかりはえられるのではないか。本論はこの思いを出発点に、石垣方言の擬音擬態語⁽⁴⁾の音声、意味、文法について、その特徴をおおまかにみていこうと思う。

どういった語を擬音擬態語としてみとめるか。本論では次のような基準にもとづき、語彙をみつめていった。

- ・動詞や形容詞の派生的なものではないもの
- ・物の音をあらわしているもの
- ・動物の鳴き声をあらわしているもの
- ・物の様子をあらわしているもの
- ・人間などの行動様式をあらわしているもの
- ・人間などの気持をあらわしているもの

しかし、これはほんとうにおおざっぱな判断基準であるから、くわしくは、つぎの3つの分類にもとづき、それぞれに分析、考察をすすめていこうと思う。

- 1) 音声的な特徴
- 2) 意味的な特徴
- 3) 文法的な特徴

1. 音声的な特徴

1-1 擬音擬態語を構成する音素

1-1-1 母音

石垣方言には /a、i、u、e、o、ï、ë / の7つの短い母音とその長音化した母音がある。これらは、語中ではほかの子音と自由にむすびついて音節をつくるが、単独で語頭にたつて、擬音擬態語をあらわす例はほとんどみられなかった。⁽⁶⁾

/a/ アーアー⁽⁷⁾ 嘆き悲しむさま。

/o/ オホーオホー 咳をするさま。ごほんごほん。

1-1-2 子音

石垣方言には口蓋化しない子音音素 /k、g、s、z [dz]、t、c [ts]、d、n、h、b、p、m、j、ʔj、r、w、ʔw、/ と、口蓋化した子音音素 /kj、gj、sj、zj、cj、dj、nj、hj、bj、pj、mj、/、唇音化した子音音素 /w、kw、gw、hw [ɸ] / があり、これらは語頭、語中で母音をともなって音節をつくることことができる。ほかに、/Q、N、N:/ の音節を閉じる子音音素があるが、これらは語頭では音節をひらく子音としてはたらくこと⁽⁸⁾ができる。

石垣方言の擬音擬態語を構成する子音音素の特徴として、清音よりも濁音が多く用いられるという傾向がみられる。たとえば、語頭における /k/ と /g/ の対立をみても、/g/ ではじまる擬音擬態語のほうが多いし、/t/ と /d/ の対立でもやはり /d/ のほうが多い。そして、擬音擬態語に使用される子音音素はこのような対立をもつものに集中している。つまり、/n//m/ などの子音音素ではじまる擬音擬態語はほとんど見られない

1-2 擬音擬態語を構成する音素と音象徴

日本語では、擬音擬態語にもちいられる音は、清音と濁音の対立が「かるやかさ」と「おもさ」、「うつくしさ」と「きたなさ」など、音からイメージされるものと意味的特徴とがむすびついている。母音も [a] [o] は [i] に比べ、おおきいことやゆっくりな感じを象徴していたり、子音も [k] [t] [g] は固い感じを、[s] [z] は摩擦がともなう感じをあらわすのをたすけている。石垣

方言ではどうだろうか。意味と音象徴について考えてみたい。

キウラキウラ 光輝くさま。きらきら。

ギウラギウラ ①油などの光る様子。ぎらぎら。②身震いするさま。

の対立をみると、日本語と同じようなとらえかたをしているといってもよいだろう。ただ「ギウラギウラ」の「②身震いするさま」とふるえるさまをあらかわしているのは興味深い。このあたりに石垣方言独特の感覚がはたらいているのだろう。また日本語では物や人間がゆるがないでいる様子を「しゃん(と)」と表現するが、石垣方言ではそれにあたる擬音擬態語として「ギャンギャンシ(健康で丈夫なさま)」という。日本語には濁音をマイナス的な面に多く用いる傾向がみられるが、石垣方言の濁音にはそれほど感じられない。

1-3 音節構造

1-3-1 分類と語例

日本語では擬音擬態語は語末の音節のタイプから、つぎのように大きく分類される。

- ①「り」でおわるもの(がたり、ごとり、ぽたり)
- ②長音でおわるもの(があがあ、ごうごう)
- ③つまる音「っ」でおわるもの(がたっ、ごとっ、ぽたっ)
- ④はねる音「ん」でおわるもの(がたん、ごとん、ぽたん)

そして、語構成のタイプでは、日本語の擬音擬態語は「がたん」「がたっ」「がたり」のように、それでひとまとまりの擬音擬態語として構成されているもの、「がたがた」「ごとりごとり」のように、同じひとまとまりの擬音擬態語がくりかえされて構成されているもの、「がたごと」「がたりごとり」のように、異なるまとまりの擬音擬態語があわさって構成されているものに分けられる。そして、この特徴は石垣方言にもみられる。

まず、語尾の音節に注目し、つぎのパターンに分類してみることにした。⁽⁹⁾

- (1) 語尾が短母音でおわるもの
- (2) 語尾が長母音でおわるもの
- (3) 語尾がつまる音でおわるもの

(4) 語尾がはねる音でおわるもの

これらをさらに、語構成の視点から、

- [1] くりかえさないもの
- [2] おなじひとまとまりの単位がくりかえすもの（完全なくりかえし）
- [3] ことなるひとまとまりの単位があわさっているもの（不完全なくりかえし）
- [4] まったくことなるまとまりの単位があわさっているもの
に分け、分類をおこなった。

(1) 語尾が短母音でおわるもの

- [2] スルスル かさこそ。木の葉などの擦れる音。
- [2] ゴーリウゴーリウ 息を引き取るとき、喉のぜえぜえなる様子。
ぜえぜえ。
- [2] ガッサガッサ ①さっさといきおいよく食べるさまの形容。
②腹の鳴る音の形容。ごろごろ
- [3] ガッサラガサラ 歯でものを噛むことの形容。がじがじ。
- [3] ガッダリウガダリウ がたがた震えるさま。びくびくするさま

(2) 語尾が長母音でおわるもの

- [2] ガーガー ①やかましくしゃべるさま。がやがや。
②カラスが鳴くさま。
- [2] ワーワー 大声で泣くさま。わあわあ。

(3) 語尾がつまる音でおわるもの

- [1] スブツ（トゥ）⁽¹⁰⁾ びっしょり
- [1] ダフツ（テ） ①どうっと、ざあっと。
②水に勢いよくつけるさま。ざぶっと。
- [1] シウターンツ（テ） すとーんと。物の落ちる音。
- [1] ピターンツ（テ） 平手で打つ音。
- [1] ザフツ（テ） ぐざりと。物を突き刺す音。
- [1] ダーツ（テ） ぐったり。ぐだっと。
疲れているさま。なえているさま。

語尾がつまる音でおわるものはくりかえしの構造をもたないものがほとんど

どである。また、つまる音「ッ」はつねに助詞相当語である「テ」をとともな⁽¹¹⁾う。

(4) 語尾がはねる音でおわるもの

- [1] パツァン ぷつり。ひもなどが切れる音。
 [2] シウトーンシウトーン すとーんと。物の落ちる音。
 [4] ゴーンパターン どたばたと大きな音をたてるさま。どたばた。
 [4] ドーンパターン どたばたと。どたんばたん。音の高くなる形容。

1-3-2 考察

(1) 石垣方言にも日本語にみられるような「語尾が“り”でおわるもの」とまとめてもいいようなグループ（語尾が「リ」または「リウ」でおわる）があった。

(2) 日本語では「びしばし」「どたばた」のように完全なくりかえしでない場合も、それを構成する前要素と後要素の音に濁音と清音が混じることはほとんどないが、石垣方言では、そのような例がみられた。

- ドントン ときどき。心臓が鼓動する音の形容。
 ギウーダカーダ くつついて離れないさま。ぺたっと。
 ゴンゴン 水など液体を勢いよく飲み下ろすさま。がぶがぶ。
 ごくんごくん。

これは日本語にくらべて石垣方言のほうが、音や様子を表現するさいに、より柔軟にそれをとらえようとしている、ということであらわしているのだろうか。しかし、これらもたとえば、清音が前要素に、濁音が後要素に、といった例はなく、前要素の語頭には濁音が、後要素の語頭には清音が、という調音的な制約をもっている。

(3) 今回は語尾の音節について注目してみたが、日本語の擬音擬態語にはひとまとまりの単位がくりかえす語中につまる音やはねる音が入っている場合、それを強調形として、別にとりたてて分析をおこなっている研究もある⁽¹²⁾し、また、つまる音は動作や作用の瞬間性をあらわしたり、はねる音は弾力性、「り」音は一回性をあらわすなど、その語尾の音節がになう機能をもっているともいわれる。それを比較するためのペアは『石垣方言辞典』であつかわれている語例だけでは足りないのだが、例をあげると、次のペ

アがある。

ピウカピウカ	}	ぴかぴか。光り輝くさま。
ピウツカリピウツカリ		

(ふつうは「ピウツカリピウツカリ」を使う。)

ポーチポーチ	}	ちりぢりに。ばらばらに。
ポーツチポーツチ		

ミーカートウーカー	}	すっかり見通されて。
ミーツカートウツカー		

- (4) 石垣方言で、「テ」という助詞相当語はほかの単語とはむすびつかず、擬音擬態語とむすびついている。「テ」のまえにはかならずはねる音「ン」か、つまる音「ッ」が存在する。今回はこの観点からは分析をこころみなかったが、韻律的性質と調音制約、文法的な制約⁽¹³⁾についても着目し、さらにくわしく分析したい。ほかにも、日本語で、「グサッ(と)」「グサリ(と)」はいえても、「グサン(と)」とはいえないように、石垣方言にも、共起制限はあると思われる。さらに多くの例をあつめたい。
- (5) 今回は辞典に見出し語としてとりあげられた語形をあつかったが、日常生活の場面ではその状況に応じて、話者の心理的状況をあらわすために、長音やはねる音、つまる音が活用されていると思われる。その個々の状況における擬音擬態語の音声的な特徴についてもさらに調査をすすめてみたいと思う。

1-4 アクセントとリズム構造

1-4-1 アクセント

日本語ではくりかえしの構造をもつ擬音擬態語のアクセントには大きく3つのパターンがある。

- ① 平板型：ピカピカに、ピカピカだ、ピカピカの
- ② 頭高型：ピ^ˊカピカ(と)、ポ^ˊンポンと、ス^ˊイスイと
- ③ 尾高型：ピカピカ^ˊッと、ポキポキ^ˊッと、コロコロ^ˊッと

この分類はその擬音擬態語が文のなかでどのようなはたらきをもつか、ということにも関係⁽¹⁴⁾している。さて、石垣方言ではどうだろうか。『石垣方言

辞典』におさめられているすべての見出し語、例文にはアクセント表記が⁽¹⁵⁾ほどこされているが、今回は、音節とモーラであらわされるリズム構造について、先にみていこうと思う。

1-4-2 リズム構造

石垣方言の擬音擬態語の語構成をしてみると、くりかえさない構造よりは、おなじひとまとまりの単位のくりかえしか、音声は異なるが、リズム的に同じものをもつまとまりとあわさってできているものが多い。部分的にことなるくりかえしの構造であっても、全体として安定したリズム構造をもっている印象を受ける。ここで、石垣方言の擬音擬態語のもつリズム構造についてふれてみたい。

まず、石垣方言の擬音擬態語のなかで、2音節のひとまとまりの単位がくりかえす、全体として4音節の構造をもつものをみてみよう。

● 6モーラ

ガッサガッサ	さっさといきおいよく食べるさま。
ゴーリウゴーリウ	①息を引き取るとき、喉のぜえぜえなる様子。 ②腹の鳴る音の形容。ごろごろ。

● 8モーラ

ガバーンガバーン	固いもののぶつかりあう音。がたんがたん。がたがた。
パツァーンパツァーン	①木の枝などの折れる音。ぽきりぽきり。 ②ものの燃える音。ぱちぱち。
ゴーッサゴーッサ	①強くものを削ったりするさま。ごしごし。 ②擦りつけたりするさま。ごしごし。
ベーッタベーッタ	①物がしなうさま。たわむさま。ゆさゆさ。 ②実った稲などが揺れるさま。
ヨーッタヨーッタ	①よたよた。よろめくさま。 ②ゆらゆらとゆれるさま。

また、同じ4音節でも7モーラの例もある。

ガーバリウパタリウ	固いものを荒々しく扱うときの大きな音の形容。
-----------	------------------------

がたがた

ガッダリウガダリウ がたがた震えるさま。びくびくするさま。

ここであげた例は4音節という点では共通しているが、それを構成する音素も、モーラ数もことなる。しかし、全体として共通したリズムの印象をうけるのはなぜか。このことについては今後、石垣方言をつらぬく拍 (beat) 感についてさらに観察していこうと思う。

2. 意味的特徴からみた分類と分析

2-1 他の単語とのかかわり

石垣方言には、その音や様子の印象に似せて、擬音擬態語をつくりだしたのだろうと思われる語と、ほかの単語からの関連で、その音印象がまとまったような語がある。

たとえば、「ダー」という音を前要素にもつ単語には

ダーシャー (名) 元気がないもの。だらだらしているもの。
のろま。

ダーシュ (名) だらだらした不活発な者。

ダーシュサーン (形) だらだらしている。だらしのない。

ダーキ (名) ご飯、餅が柔らかすぎる状態。

ダーキムチウ (名) 柔らかすぎる餅。

ダーキンボン (名) 柔らかすぎるご飯。

これらの単語から共通して見える「ダー」音のもつ意味的な特徴は「だらしがない」「やわらかい」ととらえていいだろう。そして、「ダー」音を構成要素にもつ擬音擬態語をみると、

ダーツカ(デ) ①びしょりと。びしょぬれの形容。②どっかと座るさま。③べったりと。液体などをぬるさま。

ダーツ(テ) ぐったり。ぐだつと。疲れているさま。なえているさま。

ダーラダーラ ①動作の鈍いさま。だらだら。②どろどろ。物を煮るとき、やわらかく溶けるさま。

ダーリウダーリウ ①物の煮えてやわらかく溶けるさま。ぐつぐつ。

②動きの緩慢なさま。だらだら。

と、やはり「ダー」のもつイメージをひきついでいる。

ほかに「ダー」音を構成要素にもつ擬音擬態語には

ダーンターン(シ) 叩く音の形容。とんとん。たんたん。たあんとあん。

ダーン(テ) どうんと。どたあんと。どすん。物が倒れたり、また落ちたりするさま。

があるが、それはさきほどのべた「ダー」音のイメージに「重たい、鈍い」というイメージをつけくわえる。

石垣方言では擬音擬態語のなかでも物や動作、状態のようすをあらわすものは、それを象徴する音節(接辞)を構成要素にもち、ほかの単語とも一つのグループをなしている。そして、音をあらわすものには、石垣方言の音に対する言語認識が音素にたくされている。どの音にどのような印象が象徴されているのかについては、擬音擬態語をもとに、ほかの単語からも共通性を見出していきたい。

2-2 くりかえしの構造がもたらすもの

日本語では、たとえば、反転を表す「ころ」は「ころっ」は転がりかけること、「ころころ」は連続して転がること、「ころんころん」は弾みをもって勢いよく転がること⁽¹⁶⁾、などと、くりかえしの構造があっても、基本的な「ころ」のもつ「転がる」という意味からとおくはなれていくことはない。石垣方言でも多くの場合はそうである。

ガー	カラスの鳴き声
ガーガー	①やかましくしゃべるさま。がやがや。 ②カラスが鳴くさま
ダン(テ)	急いで。早く。さっさと。
ダンダン(シ)	さっさと。急いで。
ダーッカ(テ)	①びっしょりと。びしょぬれの形容。 ②どっかと座るさま。 ③べったりと。液体などをぬるさま。
ダーッカダーッカ(シ)	①だらだらと。

②べとべととして。水気の多いさま。

しかし、石垣方言では、語構成、音節としてみると、まったく同じひとまとまりのくりかえしであっても、意味がまったくことなる場合もみられる。

ゴッフア(デ) ごっそり。すっきり。一時にたくさん。すっきり残さず。

ゴッフアゴッフア(シ) こくりこくりと。こっくりこっくり。居眠りするさま。

2-3 日本語への翻訳

石垣方言の擬音擬態語のニュアンスは日本語でもさがせば、またあたらしくつくれば、合うのがみつかるだろうが、日本語ではなんとも表現しがたいものがある。いくつか例をあげると、

ギウーギウー(シ) はっきり。ギウーギウーシ ムネー イジ (発音正しくはっきりとものを言え)。

もともと、日本語でも擬音擬態語は造語能力は高いが、それが一般化され、辞書にのるのはその一部だ、とさえ言われている。そうだとすれば、この「ギウーギウー(シ)」も、日本語で、それに合うような擬音擬態語を新しくつくればいいのだが、その難しさを感じてしまうのは、日本語としての音のイメージがやはり定着してしまっているからだろうか。詩や文学のなかでは擬音擬態語をとおして、新しい音のイメージをつくりだす試みがつづけられているが、石垣方言のもつ、音のイメージの世界についても音声的な特徴とのかかわりも合わせて、つづけて関心をもっていたい。

2-4 擬音擬態語の表現するもの

石垣方言の擬音擬態語は日本語に比べると、精神的、心理的な状態や物の抽象的な状態を表わすものが少ない⁽¹⁷⁾、といわれるが、果たしてそうだろうか。精神的、心理的な状態や物の抽象的な状態を表わすとき、そこには形容詞とのあいまいな境界がでてくる。たとえば、日本語なら、形容詞派生の副詞はその語尾の「い」を「く」に変える、という処理をおこなえばよいのだが、石垣方言では、形容詞の語幹を重ねたり、形容詞の語幹にさらに他の形容詞

の語幹、また似たような語感のするような言葉を重ねてつくったり、動詞の連用形を重ねることによって、副詞をつくる。その「重ねる」という処理は、形容詞や動詞から派生してきた副詞と、擬音擬態語をもちいた副詞を見た目の語構成の点では同じにしてしまう。また、物事の状態を表わす、という共通性をもっているから、語構成が同じである場合、そこにはあいまいさがさらにます。今回は副詞の中で畳語形式をもつもののうち、形容詞や動詞にその派生元を見つけることができるものは対象としなかったが、次の課題として、それも視野にいれて、分析したい。

3. 文法的特徴からみた分類と分析

擬音語・擬態語は外界の物音や人間や動物の声、様子・心情などを、言葉を用いてあらわす。文の中では、主語や述語、修飾語、独立語の4つの働きをすることが可能であり、そのもちいられかたによって、名詞、副詞、感動詞などと異なる品詞名で呼ばれることとなる。しかし、もともとが音や様子を描写して述語を修飾する用法から出発しているため、副詞の用法がもっとも多くなる。日本語文法で、副詞は、「すっかり」「すでに」「ぴったり」など、動作や作用の状態をあらわす「状態副詞」、「もっと」「非常に」「ずっと」など、性質や状態の程度をあらわす「程度副詞」、「けっして」「きっと」「たとえ」など、文の結びに特定の呼応表現を必要とする「陳述副詞」の3つに分けられ、⁽¹⁸⁾このなかで、擬音擬態語は「状態副詞」に分類されている。

はたして、石垣方言ではどうだろうか。『石垣方言辞典』文法編によると、石垣方言の副詞は文法的な特徴から8つに分類されている。本論ではそのなかでつぎの3つの分類を中心にあつかう。

- ①擬態語、擬音語などに助詞のデ [de]、テ [te]、トゥ [tu]、シ [ʃi] などをつけた副詞
- ②同じ擬音擬態語を重ねた副詞
- ③異なる擬音擬態語を重ねた副詞

『石垣方言辞典』の本文編でここに分類された副詞をみると、助詞をともなわずに見出し語としてとりあげられているものも少なくない。⁽¹⁹⁾また、琉球方言圏で有力な方言である首里方言は -suN, -mikasun などの接尾辞

をともなって、述語として機能することが多い⁽²⁰⁾。これにくらべて、『石垣方言辞典』の例文をみるかぎり、石垣方言は助詞がつくことによって、またそれなしでも、修飾語としての機能はきちんとはたしているようだ。しかし、今回、その文法的な働きについて、くわしく調査、考察をすることができなかつた。次の課題としたい。

〈注〉

- (1) 典型的な場合は擬音語と擬態語ははっきりと区別することができるのだが、どちらであるか、その境界があいまいな場合もあるため、本論では擬音語と擬態語を「擬音擬態語」として、ひろくとらえてみようと思う。また擬声語という用語を使う場合もあるが、本論では擬音語という用語をもちいることにした。
- (2) ここでいう日本語とは現代日本語標準語のこと。本論で日本語というときはそれをさす。
- (3) 石垣方言話者宮城信勇氏（1920生）が母、宮城文（1891-1990）の遺志をひきつぎ、20数年の歳月をかけ完成させた方言辞典。収録語彙数は約17,600。すべての方言見出し語、例文にカナ表記、音声表記、アクセント表記がほどこされている。2004年第31回伊波普猷賞受賞。本論でとりあげた石垣方言の語彙はすべてこの辞典によるものである。
- (4) 「石垣方言の擬声・擬態語は、そのほかの品詞や単語に比べた場合、形容詞以上に、標準語との音声形式の対応がみられないばかりか、首里方言や宮古方言とも一致する単語は少ない。」（『言語学大辞典』〈八重山方言〉より）
- (5) 日本語では人間の泣き声や笑い声など声についての表現も擬音語の中でとりあつかっているが、『石垣方言辞典』ではそれらがあるときは副詞とみなしていたり、あるときは感動詞とみなしていたりと、ゆらいでいるため、本論ではこれを擬音語の分類からはずした。
- (6) /ë//ë:/ は単独では音節をつくらないし、/t//d//h//p//j/ などとはむすびつかない。くわしくは『石垣方言辞典』（本文編）「凡例」参照。
- (7) 本稿では見やすさへの考慮と、紙面の都合もあり、石垣方言の表記はカナ表記のみを使用することにした。

- (8) 『石垣方言辞典』には音声のバリエーションとして母音の無声化や子音の摩擦音が表記に反映されており、擬音擬態語にもいくつかの例をみることができる。日本語の擬音擬態語ではその発話状況にあった効果をだすために、話し手がわざと音声が無声化してみたり、摩擦や破裂を強くしてみたり、と演出することがあるが、それは個別の場面にたよったものである。石垣方言でも発話状況にたよった音声の演出がみられるかどうかは、まだ調査をしていないのだが、今『石垣方言辞典』の例をみるかぎり、なんらかの音声的な演出効果をあたえているために母音の無声化が起きているわけではなく、多くはその音節構造の必然によっておきた無声化であるといえる。

『沖縄語辞典』に収められている首里方言では、/q/ は語頭で音節をひらく子音としてもはたらき、カナ表記にすると、[ツ] である。『石垣方言辞典』の中でも語頭における [ツ] の表記がみられるがこのばあいはほとんどが、喉頭での調音ではなく、母音の無声化によっておきた現象をあらわしている。

ッサークサー [s̥sa:kusa:] そそくさと。あたふたと。
 落ちつかないさま。

という例があるが、これはもともと「シウサークサー」であったものが、語頭のシウの中舌母音 [i] が無声化してしまい、音声的には摩擦音がかすかにともなっているにとらえられていることをあらわしている。

語頭音が無声化してしまった語例には

ピチュルピチュル（シ） 湿気がなくすべすべしているさま。

があるが、この「ピ」音の母音は無声化してしまっていて、実際の発話では [p] の破裂音の形跡しか耳に残らない。

また、『石垣方言辞典』に [p] [b] のバリエーションとして、[ps] [bz] で表記された擬音擬態語の例には

ビウガービウガー [b'iga:biga:] 湿気がなくすべすべしているさま。

があるが、これは声立ての段階で [b] にともなって、摩擦音が観察されたものである。ほかには

ピウカピウカ [p'ikap'ika] ぴかぴか。光り輝くさま。

などがあるが、これも、擬音擬態語に限らず他の単語でもみられる現象のため、擬音擬態語特有の音を象徴しているとはいえない。

- (9) 『石垣方言辞典』では、擬音擬態語に助詞のデ [de]、テ [te]、シ [Si]、トゥ [tu] などがついて副詞として見出し語にとりあげられているものも多いが、音声的な特徴をみるとときにはその助詞ははずした形でみていくことにした。
- (10) 本稿では擬音擬態語に付属する助詞、助詞相当語は（ ）内に示すことにする。
- (11) 石垣方言の擬音擬態語のなかにはこのように助詞をかならず必要とするタイプとそうでないタイプがあって、それは『石垣方言辞典』の見出し語に反映されている。例文中では助詞をともなっている、見出し語で助詞がついていなければ、それは助詞なしでも使える擬音擬態語として、みとめられている（話者・宮城信勇氏談）。そして、つまる音「ッ」につづく「テ」は省くことはできない。はねる音「ン」とむすびつく「テ」もあるため、ここでは「テ」は擬音擬態語につく接辞としてとらえることにした。助詞、助詞相当の接辞が擬音擬態語の構造のなかで、文法的な役割をはたすのか、また調音的な必要性から、語調を整えるためにもちいられるのか、については、これからさらに調査しなければならない。
- (12) 那須 1999。
- (13) 那須 2001 「『ピッカピカ』『ピカッピカ』のように語中に促音が挿入されるタイプの強調形は、そのオノマトペが結果副詞的、形容詞的用法を持つ場合に限って現れる。一方、『と』を伴って状態副詞的に機能するオノマトペではこのようなタイプの形態には現れない。」
- (14) 那須 2001 「当該の重複形が『に、だ、の』などを伴って形容動詞的、結果副詞的にはたらく場合には平板型 (1a) のアクセントが現われ、助詞『と』を伴って状態副詞的にもちいられる場合には頭高型 (1b) や尾高型 (1c) など起伏式のパターンをとる。」
- (15) 『石垣方言辞典』のアクセント表記は筆者の宮城信勇氏が発声し録音したものを忠実に再現している。そのために見出し語であっても、その前の見出し語のモダリティに影響されていたり、同じリズム構造をもっている、文の内容や発話の状況において、感情の込め方がことになってくるため、見出し語のアクセント表記と例文のなかの単語のアクセントが異なっている。それは自然なことなのだが、現段階で『石垣方言辞典』だけの情報からアクセン

トを論じることには困難さがともなうので、比較的安定した情報である、リズム構造からみていきたいと思う。

- (16) 金田一春彦 1978より。
- (17) 『言語学大辞典』琉球列島の言語 八重山方言〔文法〕5) 副詞
- (18) 日本語では副詞の研究がすすみ、この3分類では説明できないことも多く指摘されてきているし、擬音擬態語がそれに付属する助詞によって、文中で状態副詞として、また結果副詞としてはたらく場合がある。しかし、ここではそれを研究することが目的ではないから、一般的な分類として利用し、文法的な機能については、これからくわしく分析していきたいと思う。
- (19) 『石垣方言辞典』の擬音擬態語の見出し語に助詞がついているものと、ついていないものの判断は宮城信勇氏の内省にもとづいている。助詞がついているものは、その擬音擬態語を使用するとき、助詞をつけた形で使うのがふつうであって、助詞がついていないものは、助詞なしでも使えることを示している。
- (20) 『言語学大辞典』琉球列島の言語 沖縄中南部方言〔文法〕9) 副詞

参考文献

- ・宮城信勇 2003年9月 『石垣方言辞典』 沖縄タイムス社
- ・国立国語研究所編 1963年 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- ・浅野鶴子 1978年4月 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店
- ・飛田良文・浅田秀子 2002年9月 『現代擬音語・擬態語用法辞典』 東京堂出版
- ・加治工真市 1985年 「八重山方言概説」 『講座方言学10』 国書刊行会
- ・上村幸雄他 1992年1月 「琉球列島の言語」 『言語学大辞典』第4巻 三省堂
- ・上村幸雄 1997年7月 「日本語音声の歴史的なふかさと地域的なひろがり」 『諸方言のアクセントとイントネーション』第2章 方言アクセントとイントネーション 2-1. 三省堂
- ・工藤浩 1985年9月 「副詞」 『言語生活』406 大修館書店
- ・山口仲美 2001年10月 「擬音語・擬態語の変化」 『日本語史研究の課題』武

蔵野書院

- ・鈴木重幸 1972年5月 「副詞」『日本語文法・形態論』「第2部 形態論」第15章 むぎ書房
- ・宮島達夫 1994年12月 「状態副詞と陳述」『語彙論研究』「第4部 単語の文法的性質と意味」第7章 むぎ書房
- ・新川忠 1996年10月 「副詞の意味と機能－結果副詞をめぐる－」『ことばの科学7』 むぎ書房
- ・那須昭夫 1999年11月 「重複形オノマトペの強調形態と有標性」『日本語・日本文化研究』第9号 大阪外国語大学
- ・那須昭夫 2001年 「重複形オノマトペの韻律的構造」『大阪外国語大学論集』25 大阪外国語大学
- ・那須昭夫 2001年11月 「オノマトペの語形成とアクセント」『日本語・日本文化研究』第11号 大阪外国語大学
- ・増田アヤ子 1993年3月 『ニュアンスがわかる擬声語・擬態語』 専門教育出版
- ・日向茂男・日比谷潤子 1989年7月 『擬音語・擬態語』 荒竹出版
- ・金田一春彦 1978年4月 『擬音語・擬態語概説』 角川書店

付記

私が初めて石垣方言とその話者である宮城信勇先生に出会ったのは、1994年、沖縄県立芸術大学大学院に入学したころである。私の指導教官であった加治工真市先生がひきあわせてくれたのだった。ちょうどその頃『石垣方言辞典』の編纂作業が進んでいて、その内容が録音されたテープが加治工研究室にずらりと並べられていた。そのテープの中から何本か渡され、四苦八苦しなながら、文字に起こしていったのが、なつかしく思いだされる。石垣方言のもつアクセントやリズム構造にも慣れず、ましてその音声も聞き取れず、何回も何回も聞きなおして、やっと表記し、できあがったものを加治工先生と聞きなおす。毎回真っ赤になるまで訂正された。悔しい思いもしたし、始めのころは正直に言って苦痛さえ感じていた。しかし、そんな私に加治工先生はいつも誠実に接してくださった。「あ、これは母音の無声化だね。」「この語頭の部分には摩擦が感じられるね。」早く先に進みたい

私とは裏腹に、一つ一つの音を丁寧に聞き漏らさず、納得いくまで聞きなおす先生。加治工先生が何かにこだわりはじめると、なかなか前には進まないの、私はテープを文字に起こす段階で細心の注意を払うようになった。それでもたくさん訂正されることに変わりはないが、あの作業をとおして鍛えられたのは確かである。そして、大学院在学中の2年間では研究しきれないほどの興味のあるテーマを加治工先生は示唆してくれた。そのあとも『石垣方言辞典』の編纂作業にかかわらせていただいたのだが、あのころは感じられなかった愛着が今長い時間をかけて私のなかに育ってきている。それは、宮城信勇先生の人柄によるものでもあり、石垣方言自体のもつ世界にひかれているとも思う。そして、研究対象として石垣方言にむきあうとき、私のなかには、いつ研究室に行ってもテープレコーダーを前に何度も聞きなおしている加治工先生の姿がある。先生と一緒に悪戦苦闘していたあの時間がどれだけ自分に多くのものを与えてくれたのか、その大きさをあらためて感じている。

私は熱心で優秀な学生ではなかったが、加治工先生が与えてくださった石垣方言との出会いを大切にしたいと思っている。今回のこのレポートもまだ石垣方言の擬音擬態語について、全体的な考察ができずじまいでなんとも中途半端ではあるが、退官される先生に、これまでの感謝をこめて、しるした。

(ほかま みなこ・沖縄大学非常勤講師)